道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル 創る

特別号

2017.3

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.

レポート

山本幸三地方創生担当大臣を招いての
北海道地域創生セミナー
～実践事例から学ぶ新たな展開～

「北海道地域創生セミナー」開催にあたって

北海道知事　高橋　はるみ

本日は、山本地方創生担当大臣をお迎えし、このように多くの皆様方のご参集をいただき、北海道地域創生セミナーを開催することができますことに、心から感謝を申し上げます。

さて、北海道では、総合戦略の策定から一年余りが経つ中、外国人来訪者数が２００万人を超え、この冬も、多くの国、地域の皆様にご来道いただき、雪まつりをはじめとした各地のイベントを楽しんでいただいております。加えて、道産食品の輸出につきましても、水産物に加え、お米やスイーツなどが大きく伸びてきているところであり、いわゆる「稼ぐ力」が着実に高まってきているのではないかと感じているところであります。

一方、道内各地に目を向けますと、観光ＤＭＯの形成や、生涯活躍のまちづくり、さらには食の魅力を生かした地域商社の設立など、新たな取組の芽も生まれてきております。

こうした各地で育まれつつある地方創生の芽を今後さらに伸ばしていくため、本日は、山本大臣をお招きし、地方創生の理念や、自らがご覧になられた全国の成功事例をお話しいただくとともに、株式会社トビムシの竹本代表、マグロ女子会の杉本様、十勝バスの野村社長には、貴重な実践事例をご紹介いただくこととしております。

本日のセミナーが、ご参加の皆様にとって、北海道の強みや課題を改めて見つめ直し、地方創生を次のステージへと進化させていくための一助となることを大いに祈念してご挨拶とさせていただきます。

開催概要	
開催日時	2017年2月11日（土）14:00～16:00
会　　場	札幌プリンスホテル　国際館パミール　6階
主　　催 共　　催	北海道 北海道創生協議会

プログラム			
基調講演		地方創生担当大臣　山本　幸三　氏	P.01
事例発表	1	株式会社トビムシ 代表取締役　竹本　吉輝　氏	P.06
	2	津軽海峡マグロ女子会 北海道側代表　杉本　夏子　氏	P.10
	3	十勝バス株式会社 代表取締役社長　野村　文吾　氏	P.14

基調講演

実践事例から学ぶ新たな展開

地方創生担当大臣　山本　幸三　氏

「稼ぐ力」と「自助の精神」

地方創生担当大臣の山本幸三です。

本日は、北海道主催の北海道地域創生セミナーにお招きいただきまして、誠にありがとうございます。私は、昨年8月に地方創生担当大臣を拝命しましたが、そもそも地方創生とは何かというのを、私なりに定義をしますと、「地方の平均所得を上げること」だと考えております。つまり、稼ぐことが大事だということを常に申し上げております。

もちろん、豊かさとか生きがいとか、大切なことはあるわけですが、稼がなければ持続しません。地域が持続的に発展していくためは、稼ぎにつなぐ取組が必要だということです。それでは、稼ぐにはどうしたらいいか。簡単に言えば、自分の地域から、よそに何かを売り出す、輸出するということ。あるいは、観光客を呼び込んで、観光によって来訪した人に何かを売る、つまり輸出するということです。

観光というのは輸出の一つであります。そういう輸出をどれだけ大きくするか、これがポイントです。

逆に、これまで外に対してどんどんお金を払っていた、輸入に当たるところですが、そういうところを見直して、できるものなら自分の地域で代替できないかということを考えていく、これが稼ぎにつながる最も基本的な考え方ではなかろうかと思います。

もう一つ、私が重要と考えていることは「自助の精神」です。地方創生というのは、国が何かをやってくれるということではなく、自分たちの創意工夫で自分たちの地域をよくしようという自助の精神がなければ決してうまくいきません。

これから幾つか例をお話し申し上げますが、これまで全国各地を見てきて、つくづく感じるのは、自助の精神を持っているところは本当に実績も上がってきています。地方創生がうまくいっていないところは、トップが駄目だったと将来必ず言われるようになると私は思っております。そのため、この点を是非、多くの地方の首長さんの方々は自覚していただきたいと思っているところです。

是非、自助の精神を発揮し、稼ぐ取組を頑張っていただきたいと思っておりますし、私どもは、それに対して、まさに情報面、人材面、財政面で強力に支援してまいりたいと思っております。

8月の大臣就任以来、54市町村、126施設（平成29年2月11日現在）を今まで見てまいりました。本日は、その中で幾つか私の心に残った特徴のある事例をご紹介したいと思います。

「地方創生」加速の戦略　～　全国の優良事例　～

＜ポイント＞

- 「地方創生」＝『地方の平均所得を上げること』と定義。“稼ぐ”取組が重要。
- "稼ぐ"ためにはEBPM（確かな根拠に基づく政策立案）の考え方の下、RESAS等を活用した地域経済・社会実態分析が重要
  ※ EBPM＝Evidence Based Policy Making
- 大事なことは、「自助の精神」。“稼ぐ”にはどうしたら良いか、各地域が自らの強み・弱みを分析し、工夫してチャレンジするなど、自ら頑張ることが重要。
- “稼ぐ”ために自ら頑張る地域には、情報面・人材面・財政面で強力に支援。
- 8月の大臣着任以来、54市町村、126施設を訪問。私自身が、実際に視察してきた中から、各地域の参考となる事例をご紹介する。

有限会社「新福青果」による
―ICTを活用した農業
（宮崎県都城市）

まず、農業関係で、宮崎県都城の新福青果さんの取組です。

新福さんは、元々はサラリーマンでしたが、お父さんが農業をやっていたため、脱サラをして農業に取り組むようになります。しかし当時は、きちんとした給料制度や休日もありませんでした。そんな農業をやっていたら将来はないと、彼は一念発起して徹底した改革に乗り出します。

規格外品を利用した
加工食品の製造

若者や新規就農者を
積極的に雇用（左：新福社長）

畑にカメラをつけ、地上にも地下にもセンサーをつけて、天候も全部チェックします。従業員が畑に入るときには、パソコンを持たせて、トラクターの運行回数や農薬散布の状況などを全てデータ化していきます。それまでは、個人の経験と勘でやっていた農業をデータ化すると農業経営が非常に効率的に行われるようになります。若い人たちも、興味をもって参入してくれる。耕作放棄地もどんどん開拓し、今や約２００ヘクタールの農業をやっております。

また、彼は、高齢者介護施設や、障がい者施設も持っているのですが、例えば、ニンジンとかゴボウとかで規格外の部分が出てくると、それをカット野菜にして、パックにして売り出すと高く売れますし、一切無駄を出しません。

更に、障がい者や高齢者の方々が活躍できる場を創出するという好循環も生まれます。

先日伺った際も、女性の農業従事者が大変頑張っておりまして、39名のうち24名が女性で、しかも平均年齢が非常に若く、活気に溢れていました。

企業による農地取得
（兵庫県養父市）

兵庫県の養父市は、北海道と全く違って、中山間地域ですが、市長が先駆的な方で、国の特区制度を利用して、今までの農業の仕組みを全面的に変えています。農業委員会が行う許可事務も一部を市でやるようにして、去年、ついに日本初の株式会社による農地取得を認めるようにしたわけです。

今の政策では、農地中間管理機構で、農地の貸借などを集約することになっていますが、まとまった土地が借りられないという不便さがあります。また、個人での農業参入は、大規模な設備投資ができません。私は、日本の農業の将来は、法人化、株式会社化するしかないと思っており、そうしなければ社会保険もつけられないし、休日も、給料ももらえないため、若い人が就職しない。株式会社による農地取得は、全国初の取組でありますが、将来の日本の農業のあり方を示す取組だと高く評価しております。

兵庫県養父（やぶ）市
（国家戦略特区・中山間地農業の改革）

国家戦略特区における
「企業による農地取得の特例」

これまでの出資・事業要件等を満たさなくとも
一定の要件の下、
企業が農地を所有し営農することが可能に

特例を活用し
株式会社が
農地を取得
（全国初）

（株）Amnak

- 休耕田を再生し、酒米を生産
- 地域の酒蔵と連携し日本酒を生産、将来は自社醸造の日本酒輸出を目指す。

兵庫ナカバヤシ（株）

- 製本業の閑散期における業務の平準化を図るため、農業分野進出
- にんにくの生産と6次産業化、ﾌﾞﾗﾝﾄﾞ化（企業・農家との連携）に取り組む。

ここでは、2件の参入事例がありますが、そのうち1件を紹介します。

製本会社の兵庫ナカバヤシという会社です。製本というのは、注文の時期にむらがあります。1月と7月は注文が殺到しますが、それ以外は少し暇で人が余ります。そこで、社長さんは、この間を埋めるために何かいい仕事はないかということで探し求め、土地を取得して、ニンニク生産に乗り出したわけです。また、他の地域からも株式会社が農地を取得できるというので、少しずつ活気が出てきているというところです。なお、昨日、更に1件の新たな株式会社の農地取得が認められるようになりました。

休耕田を再生し、
酒米を生産

ピンチをチャンスに変える（島根県海士町）

※CASを活用した岩牡蠣「春香」のブランド化

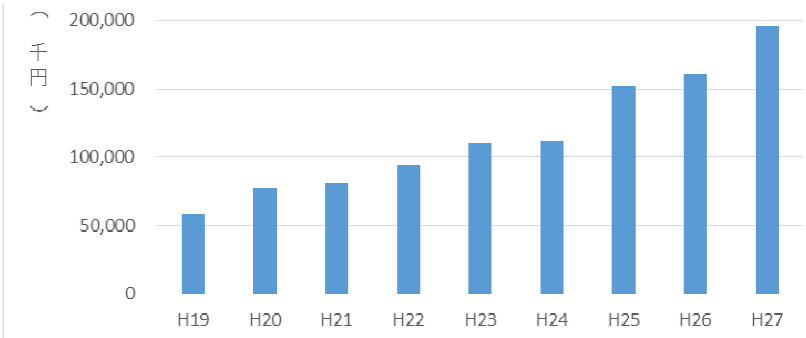
島根県海士町は、人口2400人の離島の町です。この島が2000年代の初めに消滅の危機にさらされました。イカやカキを中心に漁業で生計を立てている町ですが、市場はフェリーで半日かかり、鮮度が落ちるということで値段を落とされる。また、しけがくるとフェリーも出ないため一切所得がない。漁業者の生活に全く見込みが立たない。手立てしようにも町にもお金がない。

そこで、町長の山内さんが、市の職員たちと、自分たちでどうしたらいいかを考えます。そして、見つけたのがCASという新しい冷凍保存装置です。今までの冷凍機では、水分が凝縮、膨張して、肉や野菜、魚の細胞を壊してしまうのですが、CASを使えば、解凍しても味と香りがそのまま残ります。大体2年は確実に大丈夫と言われています。昨年その生ガキを食べましたが、2年前の生ガキだと思えないほど、味も香りも潮の香りが残っていました。

しかし、CASは高価で、費用をどうするかということになりました。そこで、町長さんは、自分の給料を半分にしてお金を作ろう。職員が自分達も3割カットしてその分を貯めましょう。そこまでやると、町会議員さん方も給料の半分出すということになり、2億円のお金を作りました。また、国の補助金をかき集めて、合計4億円くらいの資金を得て導入することができました。これが失敗したら破綻だということで、彼らは必死で努力をしました。

岩牡蠣「春香」
CAS導入によって、周年での出荷に成功

東京のマーケットに売り込みにいきましたが、これまた大変だったのです。大きなホテルとか大きなレストランは買ってくれない。なぜなら、CAS処理をするとコストがかかっているから、値段が3割ぐらい高いのです。しかし、彼らは、漁業者と島の将来を考え、この値段以下では売らないという決心をして臨みました。



CAS商品の売上高　H19：約60,000千円 → H27：約190,000千円

※Cells Alive System（細胞組織を壊さず食味の低下を防ぐ凍結技術）

最初は大変な苦労をしましたが、東京の居酒屋チェーンが、値段は一定で受け入れてくれるようになり、ようやく販売先が見つかりました。そのうち、この居酒屋は、こんな新鮮な海産物を出す居酒屋があるのかと東京で大評判になって、繁盛します。

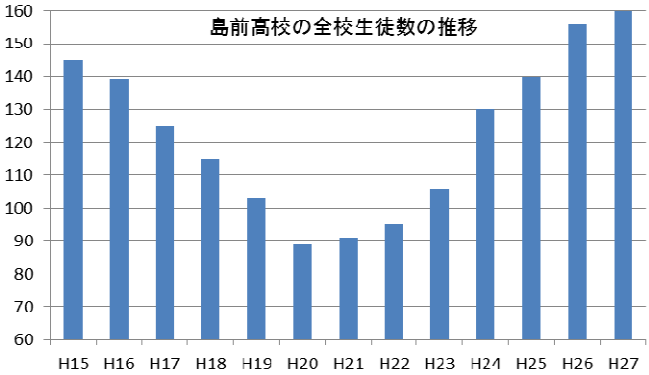
そうすると、海士町の漁民たちの生活が安定したのです。年収が１０００万円から２０００万円確保されるようになりました。漁業の生活が安定し、町は今、活気を取り戻しています。

島まるごと学校

さて、次に町長が考えたのは、教育の充実です。島には高校が一つありますが、多くが本土の高校に通うようになり、生徒が少なくなり、高校は閉鎖の危機に瀕していました。

そこで、町は、塾を作って、高校の教育とタイアップした形で補習をすることにしました。子どもたちに、自分たちの町の課題は何なのかということを考えさせるフィールドワークの実証研究を行い、その成果を東京の一橋大学の学生たちと意見交換をしながら発表する。そのうち、一橋大学の学生たちは「面白い」と海士町に興味を持つようになり、自分たちも行ってみようということで、海士町を訪ねる一橋大学の学生が増えたそうです。その後、ある学生は一橋大学を卒業後に海士町に住みついて、今、ナマコの養殖をやっている方もいらっしゃいます。

「島留学」募集チラシ



島前高校の全校生徒数の推移 H20：89名 → H27：160名

高校のレベルも上がり、慶應大学や早稲田大学に入る生徒が増えてきました。そうすると、今は、本土の島根県のみならず、全国各地からこの島に留学したいといって来るようになったそうです。

海士町では、このような取組がだんだん評判を呼んで、今は、Ｉターン、Ｕターンが増えており、年によっては人口の社会増が起きてきている状況です。

サテライトオフィスの誘致
（徳島県神山町・美波町）

徳島県は、地デジ化に併せて、高速ブロードバンド網を県内一円に敷きました。今これが功を奏しており、ＩＴ系企業のサテライトオフィスがどんどん増えています。その典型的な例が神山町と美波町であります。神山町は山間の町で、美波町は海に面した町です。それぞれの町でコワーキングスペース（共同事務所）やお試し居住というものを作り、移り住んできた人達が地元の人達と和やかに交流する取組も行っています。この結果、ＩＴ系の企業がどんどん進出しております。

進出したある社長さんからお聞きしましたが、ＩＴ系という職種はどこにいても仕事ができるというのです。東京や大阪で、朝から晩までパソコンばかり見ていると気が滅入る。社員がうつ病になり、これは大変だということで、社長さんがどこか環境の良い場所はないかと探し回ったところ、神山町と美波町の誘いがあり、それに応じて、古民家を改修してサテライトオフィスを作ったそうです。住まいもすぐ近くの古民家を紹介してもらい、社員はハンモックに寝ながらパソコンで仕事をしているそうです。そういう優雅な環境で仕事をしていると、うつ病の社員もすっかり治ったそうです。

【戎邸（えびすてい）】（美波町）
築80年の古民家を改修した
サテライトオフィス

美波町は海に近いため、仕事が終わったらサーフィンで遊べる。そのうち、近くの漁師に、今日は美味しい魚が獲れたから食べに来いと誘われて、一緒に食べて飲んで楽しく過ごすうちに、古い漁船をもらって、魚釣りも楽しめるようになったという話も聞きました。

全国に目を向けると、大いに頑張っているところがたくさんあります。是非、こういう事例を参考にして、自助の精神をもって稼ぐように頑張っていただきたいと思います。

RESASを活用した地方創生

最後に少しだけRESASについてお話し申し上げます。

RESASというのは、地域経済にかかわる様々なデータをグラフ等で見える化しているシステムです。インターネットで誰でも無料で使うことができるため、これを使って地域の課題を発見して、その具体的な解決策を考えていただきたいと思っています。

現在、全国の自治体、大学、民間企業で、様々な取組が進められています。先日も北洋銀行さんが取引先企業の財務データを掛け合わせた独自の分析モデルを発表されておりました。国でも、地方の活性化の動きを後押しするため、我々は政策アイデアコンテストを実施しております。RESASを活用して、自らの地域を分析し、地域を元気にするような政策アイデアを国民から募集するというもので、今年は全国から699件ものご応募をいただきました。最終審査会に私自身も参加させていただきましたが、思った以上に大変しっかりとしたデータ分析と、素晴らしく、面白いアイデアが出されていました。

北海道からは、小樽商科大学の大津ゼミが最終審査会に進出されまして、北海道の岩内町を取り上げ、RESASのデータや町民アンケートなどを組み合わせて、地域の強みや弱みを分析し、海を活かしたマリンアクティビティ観光などを提案したもので、見事二等賞に当たる優秀賞を受賞されました。数字やデータを活用すれば、何となく思っていた仮説に確信を持ったり、意外なデータからヒントを見つけたり、共通認識を持って議論を進めることができ、新たな政策立案につながります。

こうしたことを含めて、これからも是非、地方創生に積極的に取り組んでいただきたいと思います。我々は、皆様のしっかりとした取組に対して、情報面や人材面や財政面で、力強く支援させていただくということを改めて申し上げまして、私のお話とさせていただきます。

小樽商科大学大津ゼミの政策アイデア

地方創生☆政策アイデアコンテスト2016（内閣府地方創生推進室主催）
優秀賞（大学生以上一般の部）、三菱UFJリサーチ&コンサルティング賞

- 北海道岩内町(いわないちょう)を取り上げ、RESASなどを活用し、若年層の社会減、地元産業の強み、ニセコエリアの観光客増加といったデータを抽出
- 町民アンケートや、高校生向けワークショップの結果も加味して、地域の強み・弱みを分析
- 分析結果を踏まえて、「ニセコへの近さと海資源を生かした夏のマリンアクティビティ観光」「水産食料品製造業の強みを生かしたニシン缶の販売」等の政策アイデアを提案

RESASのデータ等を用いて、地域の強み・弱みをSWOT分析

	プラス要因	マイナス要因
内部環境	**強み（S）** ①**水産食料品製造業**の"稼ぐ力"がある （水産食料品の付加価値特化係数が高い） ②ニセコエリアにおいて数少ない**海資源**の存在	**弱み（W）** ①少子化による労働人口減少に伴う**地元産業の衰退**
外部環境	**機会（O）** ①**ニセコに訪れる観光客が増加** ②世界的人口増による**水マーケットの拡大** ③全国的な**災害対策意識の高まり**	**脅威（T）** ①若者が自分の将来を**岩内で描いていない** （10後半～20代前半の転出が特に多い） ②後志地方外からの**人口の流入が少ない**

RESAS（地域経済分析システム）
https://www.resas.go.jp
（「RESAS」で検索）

事例発表1

「地方創生」時代の森の営み、そのあり方

株式会社トビムシ　代表取締役　竹本　吉輝　氏

昭和49年　神奈川県生まれ
外資系会計事務所、環境コンサルティング会社の設立経営などを経て、2009年に株式会社トビムシ設立。森林ビジネスを通じた地域再生の取組を全国各地で展開。岡山県西粟倉村では国内初の森林・林業支援ファンドを組成、地域商社を設立。多くの移住者がローカルベンチャーとして村内で活躍する。昨年より北海道でも取組を始動。

― 始めに ―

皆さん、こんにちは。株式会社トビムシ代表の竹本と申します。

私は、２０００年から２００５年ぐらいまでは霞が関で様々な政策審議にかかわらせていただきました。その後、大臣のご紹介にありましたが、私はつい３年前まで家族でまさに島根県海士町に住んでおりました。

海士町は成功モデルだとよくいわれますが、属人的な奮闘努力、リーダーシップがあってこそのモデルだと思いますので、本日は、方法論というよりも、そのあり方みたいなものを皆様にもお持ち帰りいただければと思っております。

我々の考える地方創生というのは、自助の精神に基づいて、地域の動的平衡をいかに体現していくのか。今後数十年、数百年という中で、どのように共同体が存在し続けられるのかということを体現することです。

例えば、原生林は、五百年、千年という中で、どんな台風が来て巨木が一気に倒れても、必ずその空間として最適なものを保とうとしていく力が働き、均衡が保たれます。そのような地域をつくることに少しでもお手伝いできたらいいなということでやっております。

株式会社トビムシの活動

トビムシという会社は、２００９年、リーマンショック直後に設立しました。

日本で初めて林業の事業ファンドをつくって、一人一人に少額の出資をいただきながら、例えば、「岡山県の西粟倉村で林業を復興させ、丁寧に森とその使い手、担い手につながる仕組みをつくっていく」といった取組を、多くの都市の人たちに支えてもらいながら行っています。北海道では、昨年から占冠村の仕事をお手伝いしています。

地域商社をつくることだけが目的ではないですが、地域商社ができるような下地がつくれないかということで、いろいろ活動を開始させていただいております。

トビムシ本体は、正社員で7人しかいない小さな会社です。個人株主15人に支えられているのですが、一方で、非上場ベンチャー、しかも林業、木材業を担っているということで、金融的には、とてもサポートしがたい事業体ですが、実際に１万６０００人強の投資家をお持ちの鎌倉投信が、非上場ベンチャーに投資するということをしてくださいました。また一方で、マイクロファイナンスを通じて１０００人弱の方々が投資をしてくださっています。

ですから、本当に小さい我々のような会社に、実は１万７０００人、家族も入れますと３万人を超える多くのステークホルダーがいます。当社グループでは、ツアーを年間に十数回催行させてもらっているのですけれども、こういう方々にご紹介すれば、その日のうちにツアーは満員になるという状況

になっております。

メルマガの会員とかファンクラブとかではなく、投資家ですので、長い目線で我々が行っていること、あるいは、我々がかかわっている地域がどんな未来に向かって進んでいるのかということを温かく、そして、時に厳しく見守り続けてくれる、という存在です。

トビムシと仲間達

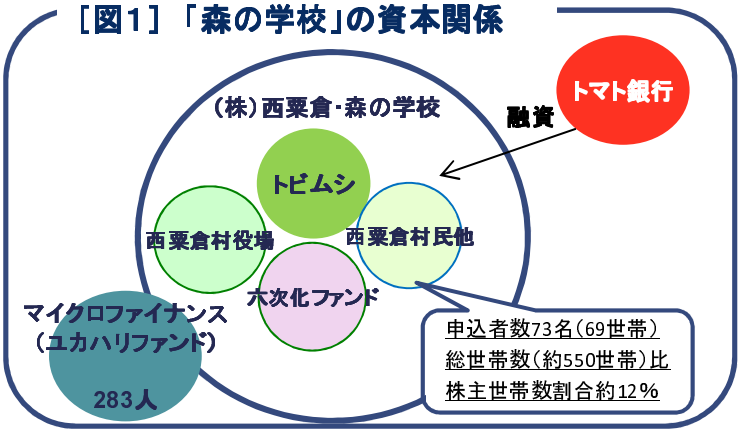
私たちの関わっている地域のプロジェクトをいくつか紹介します。

岡山県の西粟倉村の「森の学校」では、村民の方々の世帯割合12％の人にご出資をいただき、役場からも出資をいただき、林業事業体としては国内で初めて6次化ファンドを活用させてもらいました［図1］。

また、間接的ではありますけれども、国からも投資をしていただくという体制をとって、融資の部分では、地銀さんにサポートしてもらいながら事業を進めるということをしております。

東京の奥多摩町の「森と市庭」という会社は、東京の山手線の内側の4分の1と同じ面積の山を都内にお持ちの山主さんがいらっしゃるのですが、そういう山主さんから山を現物出資いただきながら、木を扱う弊社とDIYやリノベーションの大手であるR不動産、環境共生型住宅のコーディネーターをやっているチームネット、オフィスの設計デザインの大手であるディーサイン、さらに、市場である住宅リノベーションオフィスの方々から出資をいただきながら、東京の山、東京の森と東京のオフィス、あるいは住宅環境がつながるというプロジェクトを開始して進めております。

［図1］「森の学校」の資本関係



一昨年、飛騨の森でクマは踊るという、通称「ヒダクマ」という会社をつくりました。こちらは、日本で初めて私有林、公有林、パブリックフォレストを一株式会社に現物出資していただくという形態をとっております。飛騨市さんから、数多くの第3セクターを廃止するという意思決定をされている中で、新しい第3セクターを立ち上げ、しかも、森を現物出資するという英断をとっていただき、このような会社ができました。

他にも数多くのところと共同で事業運営会社の設立にかかわっているのですが、それぞれの地域のスケールで、そして、取り扱う樹種、あるいは、出てくるアウトプットとしての製品も様々で、素材だけでなくエネルギーとのバランスもとりながら、地域ごとの解決策を図っているということです。

これが先ほど申し上げた地域の動的平衡の体現という我々の意図するものです。

ヨーロッパの森
―社会インフラとして森林資源―

少しだけ森のことをお話ししたいと思います。実際に今、日本の林業が目指しているところがどこかということは横に置いて、これはフィンランドの森林風景です。もともと氷河が削ってできた空間ですので、山はあるのですが、平らな土地が山頂から見えるような山ですので、率直に言って、とても林業がやりやすいのです［写真1］。

［写真1］フィンランドの森林風景

フィンランドは、北海道とほぼ人口が同じ、国土面積が日本と同じですから、北海道の人口密度が国内において極めて低いことを考えますと、いかにフィンランドの人口密度が低いかということがよくわかります。そういう低い人口密度と豊かな森林資源、それが木材あるいは木として完全に社会インフラ化されています。それはエネルギーも含めてです。

ですので、森林資源の豊かさを生活、暮らしの中に、ビジネスとしても事業としても経済活動として取り入れている状況があります。

日本の森林風景

それに対して、日本は、まさにプレート変動による隆起と堆積物、亜熱帯から亜寒帯まであります。樹種も豊富で、地質も全く豊かなわけです。氷河の下にずっとあったヨーロッパと違って、数多くの樹種が、そして生育が担保されているような状態です。

これは、私の大好きな、我々がやっている東京奥多摩町から見た富士山です**[写真2]**。東京からは、こういうふうに見えるのです。いかに日本が隆起してできている空間かというのが一目瞭然だと思いますが、あの富士山まで一直線でいけばそんな距離ではないのですが、とても行けません。今だったら別ですけれども、かつての日本であれば、あそこにたどり着くのは大変だったわけです。登り始めたところが決して見えない隆起して入り組んでいる山々、しかも急峻です。

ここでやる林業は、先ほどあったように、樹種は多く、発育も良いにかかわらず、なかなか難しいところがあります。

［写真２］東京奥多摩町から見た富士山

これは、東京奥多摩、我々の拠点の近くにある森林です**[写真3]**。針葉樹だけではなくて、きれいな広葉樹も発育しています。それが1億2000万人の高い人口密度と近代化の流れの中で住宅需要が増えるにつれて木材が輸入超過となり、結果として放置林が増えたがゆえに、このような暗い細い木の森が増えているという状況です。

こうした状況にしっかり向き合っていくことで、我々がかかわっている岡山県の西粟倉村のような、人工林でありながら自生し、どんどん天然林も増えてくる、人工林でありながら植生が豊かで、落葉樹がなくても森としてのスポンジ機能も十分出せるような空間になるわけです。こうした取組は、この風景をつくるためにやっているわけではなく、その地域が林業、木材業の営みを続けている結果として見られる風景だということだと思っています。

［写真３］東京奥多摩の活動拠点近くの森林

今の日本にある木そのリデザイン

我々は、針葉樹、広葉樹を問わないで、今の日本にある木をいかにデザインしていくのかということを心がけてやってまいりました。この床張りタイルは、今、営業することもなく、ネット上で売れるようになってきているのですが、全くマーケティングの発想はありませんでした。材料が細い木しかない、曲がった木しかない、節の多い木しかなかったから、50㎝×10㎝の板をつくり、それを5枚張って商品化しただけなのです。完全にプロダクトアウトです**[写真4]**。

これは六本木のあるオフィスビルです**[写真5]**。工業用パレットの上に木を敷いて、一つのモジュールにして、オフィスの使い方によってこれを補充したり外したりします。この中に配線を通せるという仕組みになっているのですが、こんなことをいろいろな地域で、何でも商品にしています。広葉樹も針葉樹も、本当にこの木は使えるのですかというものまで使っています。

昨年、伊勢丹の100周年で、5階のフロアはほとんど貸し切りで、一番

いいところを使わせてもらって、「東京の森展」を開催しました【写真6】。

上：［写真４］床張りタイル
下：［写真５］工業用パレットの上に木を敷く内装のオフィスビル

［写真６］東京の森展で展示された作品

ヒノキ、サワグルミなど東京の森ならではの木を使って、さまざまなプロダクトをさまざまなクリエイターとともにつくり、販売して、物によっては輸出を開始しております。

林業は光のデザイン

林業は光のデザインだというふうに私の尊敬する林業家がおっしゃっておりますけれども、空間光量というのは一定ですので、その空間光量を高いところ、低いところ、中ぐらいのところのどこで分け合うのか。これがまさに林業の空間光量を最適にしていくという方法です。これは同じ場所の夜のヒメボタルの風景です【写真7】【写真8】。ヒメボタルというのは、水と空気がいいだけではなくて、下層植生が豊かでないと生息できません。こうして、木を生かし、その空間を生かしていくことで、昼の光のデザインができれば、結果として夜の光のデザインにまでつながるということが、多くの地域でも見られたらいいなと。北海道にはヒメボタルは生息していないので残念なのですけれども、そうすれば、風景、そして、その未来のデザインにつながっていくのではないかと信じております。

上：［写真７］昼の森林
下：［写真８］同じ場所の夜のヒメボタル

北海道における森の営みの可能性

最後に、北海道における森の営みの可能性ということだけ申し上げて終わりたいと思います。とにかく、豊穣な自然、そして豊かな緩やかな大地ですね。もちろん、大雪山、日高山脈が背骨のようにあるわけですけれども、かなり平らな土地が、本州、九州、四国に比べれば多いです。広いです。そして質の高い、バランスのいい、これは結果論かもしれませんが、内地ほど人工林、植林をしてこなかったということも含めて、結果的にものすごくバランスのいい、本州がきっと長期的に目指しているのがもう既にでき上がっている状態があります。

木材は、本当に木は木として使うのが一番いいのですが、その端材を使う、あるいは、有効に使えない木材をしっかりエネルギーに丁寧に使っていくことは重要です。ＦＩＴ（固定価格買取制度）を通じて電気にするだけでなく、熱利用することが大切なのですが、寒冷地でもある北海道の旺盛な熱需要に応えることを含め、エネルギーとしてもしっかり使っていくということができれば、非常にバランスのいい森づくり、あるいは、森を通じた人の暮らしづくりができると信じて、北海道という土地でも、森の営みを増やしていければと思っております。

tobimushi
森は地域の宝もの

会社名
株式会社トビムシ
(tobimushi Inc.)

住　所
東京都国分寺市光町２-1-25

ＴＥＬ
０４２－８４３－０１０９

ＵＲＬ
http://www.tobimushi.co.jp